
短編集 2

雪結晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集2

【Nコード】

N7770Y

【作者名】

雪結晶

【あらすじ】

短編の集まりの連載。連載を完結したら長く載るので。

恋愛相談

夜中に家で独り寛いでいると友達から突然メールが来た。まあ、メールは突然来るものだけど、そこは、ほら……解るだろ？

メールの内容を確認すると、『相談したいことがあるんだ』と書いてあった。いやー、ビックリでドッキリだよ。何故、俺に来たのか検討もつかない。相談に乗るようなタイプではないはずなのに、何事も経験だと思ってそれに返信したんだ。

『解った。今から？』

とね。

そしたら――

『明日、学校が終わった後で教室で頼む』って、返って来た。

『おっけ、解った。じゃあ、明日』

俺はそう返信して、寝ながらイメージトレーニングして明日に備えたんだ。

学校でそいつと目が合っても別に何もなく、その時がやって来た。俺とそいつしかいない教室は広く感じて、そいつの席の前に座り、机に向き合って座った。

「相談ってなに？ 俺にできることかな？」

沈黙を破ろうとして俺から話をした。すると、そいつはモジモジしだした。驚いたが、すぐに冷静になり考えた。もしかして、俺のこと好きなんじゃないかと言いだすのではないかと。ちなみに、そいつは俺と同じ同性だと言っておく。だからそうだとしても、嬉しいくないし、逆に困ることになる。俺はどうすればいいのだろう、と思った。

そいつは俺の眼をじっと見て言った。

「誰にも言わないでくれるか？」

「あつ……うん。言わないよ。でも、その前に訊きたいことがある

んだ。何で俺に相談しようと思ったんだ？」

「君と似ているかと思ったからかな……」

「……そうなんだ」

「恋愛の話なだけでさ。俺と似た人は世界にたくさんいるけど、その、あまり人に言えない感じのことなんだ」

ああ、やっぱりそっち系なのかと俺は覚悟した。それにしても俺と似ているって失礼だろ、と思ったが、心に閉まった。

「うん」

「俺は、小さい子好きなんだ。いわゆる、ロリコンっていうやつで、どうしたらいいかな？」

俺の読みは外れた。良かった。いや、良くない。ロリコンはダメだ。

「どうしたらいい……って何をどうするのかな？」

「付き合いたいんだ」

「……そうか。ロリコンだからと言って、俺は、お前を軽蔑したりしない」

一息肺に入れ言った。

「付き合いたいと言ったが、それは無理なことだ。頭の中だけで恋愛しろ。いいか？ 外に出すな、迷惑を掛けることになるし、付き合うのは犯罪だ。もし、そうしてしまうのなら、死ぬ。俺は、お前に死んでほしくない。だから、頭の中だけで恋愛しておけ。頭の中は、自由だからな。妄想だけで留めておけ。大事な事だからもう一回言うぞ。外に持ち出すな。持ち出すのであれば、死ぬ」

言うことを言った俺は、席を立ち教室にそいつを残して出ていく。そして、最後に言い忘れていたことを言った。

「あー、言い忘れていたことがあった。俺は、お前みたいなロリコン野郎じゃないからな。今度言ったら、ネット放送してやるからな！」

教室のドアを閉めた。

絶滅不良

未だに他校と争ったりしているバカ不良がいる。どんな田舎だよ、と思うだろうけど、残念ながら東京だ。

用事があり、僕が職員室にお邪魔している時に、彼は先生に怒られていた。

「また暴力事件を起こしたのか！ そんなに退学になりたいか」
不良は黙ったままだ。狼というやつなのか、沈黙がカッコイイと思っているのだろう。

「何とか言ったらどうなんだ！」

先生は不良の態度に苛立った。

「上等だ。退学なんて……クソくらえ！ 退学でもタイの学校でも何でも来やがれ」

「おい、大丈夫か？ 口は立派だが、足が震えているぞ」

先生の声を聞いて気づいた。目を下げて見ると足が尋常なほど震えていた。退学になりたくない、と訴えているようなもんだった。

僕は、ついツツコンでしまった。いや、説教というべきなのかもしれない。

「お前は不良じゃねえ！ ただの、うざい、クソガキだ！」

退学を恐れている不良は、不良ではない。

遠距離恋愛

俺には、高校から付き合っている彼女がいる。卒業して大学生になり、今は離ればなれ。遠距離恋愛というやつだ。

しかし、遠距離恋愛になって別れてしまった。遠距離恋愛はうまくいかないって言われているけど、その通りになってしまった。

ある日、友達から俺の携帯に一通のメールが来た。そこから、俺たちの関係は崩れたんだ。その内容は、彼女が浮気をしている、という心決られる残酷な知らせ。彼女のことを信じていた。信じたかったが、電話して確かめたんだ。

『ねえ、今時間ある？ 少し話したいんだけどさ』

『うん、私も声聞きたかった。どうしたの？』

『メールが来たんだ。お前が浮気しているって、ね……』

『……な、そんなことするはずないじゃん。疑ってるの？』

『そうか解った。……別れようか。俺は信じていた。だけど、君は嘘をついた。彼氏に嘘をついたんだ。しかも、その嘘は優しい嘘ではない。俺を騙すだけの嘘』

『え？ ちょっと待ってよ。嘘なんてついてないよ。私、あなたのことが好きだよ。別れたくない』

『そうか……また嘘をつくんだね。友達からのメールにね。君と他の男が一緒にいる所の写真が、しかもキスしている写真が添付されていたんだ。当然、キスだけじゃないんだろ？もう、君と恋人同士にはなれないよ』

『ごめん……ごめんね。でも、私、遠距離で会えなくて寂しかった。心に隙間が空いて、寂しさを紛らわせてしまっただけなの。あなたが本命なの、一番好きな人はあなた。ねえ、逢いたいよ』

『震えているの？』

『うん、寂しくて寒いよ』

『寂しくて震えているのなら、そのまま震えていたらいいよ。つい

でに振動したまま死んだらいいよ。俺は会いたくない』

『……ずん、う、う』

『泣いているの？ 俺も泣きたいよ。恋人は離れていても寂しくならないはずなんだ。電話しているしね。でも君は、俺のことが好きなのに寂しくなっただけの男と遊んだ。君のような人のことを何て言うのか知っているかい？ クソビッチって言うんだよ。俺の彼女にクソビッチなんていらないんだ。だから、恋人にはなれない』

『やり直すチャンス……ください。お願い。あなたが好きなの』

『……そこまで言うなら俺と付き合えるチャンスを与えるよ。彼女ができるまでのセフレとして君と付き合うよ。じゃあ、おやすみ。クソビッチ』

先輩年齢

仮にも、女性はどこまでいっても女性なんだ。大切に扱わなくてはならない。今、俺の目の前に女性がいる。俺は言ってやった。

「優先座席が空いているんだから、そっちに座れよババア！ 席を譲れという空気だして俺の前に立っていても席は譲らねえよ！ 確かにあんたは人生の先輩だよ。だからってなあ、後輩が座っている席を奪おうとしていいのか？ 何したっていいのか！ 先輩は先輩らしく寛大な心で、そこに立ってる！」

だが、ババアは対象外だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7770y/>

短編集 2

2011年11月23日15時53分発行